

## 「首座主教会議からのコミュニケ」

2016年1月15日（金）

### 『共に歩み出そうーこの世界における神のみ業のために』

ジャスティン・ウェルビー(Justin Welby)カンタベリー大主教の招待により、38の聖公会諸管区の首座主教たちの会議が、北米聖公会(Anglican Church of North America)大主教も参加して、カンタベリーにおいて、1月11日（月）から1月15日（金）にかけて開催されました。初日の朝は、祈りと断食の内に過ごしました。

私たちは、2016年の首座主教会議が、人間のセクシュアリティの問題についての教えに関する、私たちの間にある違いに関わることになるところだと思いつつ集まりました。私たちはまた、幅広い領域の事柄について語り合おうとしました。

まず会議は、議題について合意を得るところから始まりました。最初に合意されたのは、聖公会の中で世界大の論争となっている重要な論点を議論することでした。すなわち、米国聖公会が最近、結婚の教理を変更したことについてです。

週を通して首座主教たちが下した全員一致の決定は、痛みが伴うことではありましたが、私たちの間にある違いにも拘わらず、キリストの体における一致を深いところで表すものとして、私たちは共に歩む、ということでした。

私たちは、いかにアングリカン・コミュニオン内の諸教会が共に歩むことができ、私たちの一致を強めることができるのかという課題を託された、首座主教のメンバーからなるワーキング・グループからの勧告(recommendation)を受け取りました。ワーキング・グループの勧告は、従前の首座主教会議の諸声明を首尾一貫させた時に、米国聖公会の結婚の教理についての最近の変更というものが、米国聖公会のアングリカン・コミュニオンとの関係に対してどのような帰結(consequences)をもたらすのかを述べるものとなりました。「補遺A」の第7、第8にある勧告は、以下の通りです。

「共に歩みたいというのは、私たちの一致した願いである。しかしながら、これらの事柄の深刻さに鑑み、向こう3年間、米国聖公会は、もはや、エキュメニカル、および宗教間の協議体において、私たちを代表しないし、アングリカン・コミュニオン内の常置委員会を構成する者として任命されたり、選出されたりするべきではなく、アングリカン・コミュニオン内の協議体に参加する場合も、米国聖公会は、教理や教会行政に関するあらゆる課題についての意思決定に加わることはない、ということを求めることによって、この隔たりが存在することを、私たちは公式的に承認するものである。」

「私たちは、関係の回復、相互の信頼の再構築、傷の残滓の癒し、私たちの共通性の範囲の確認、私たちの間にある大きな隔たりの探究、それらがキリストの愛と恵みのうちに私たちの間に保たれることの確証を目的として、私たちの中での話し合いを続けるためのタスク・グループを任命するよう、カンタベリー大主教に求めた。」

これらの勧告は、出席した首座主教の多数によって採択されました。

私たちは、私たちの一致を脅かす、教理と教会行政についての、いかなる一方的な(unilateral)決定に対してもまた、適用することができるこのプロセスを、さらに進めていくこととなります。

首座主教たちは、同性愛を嫌悪する偏見や暴力を非難し、性的指向性の如何に拘わらず、牧会的配慮と愛の奉仕をささげるために、共に働くことを決意しました。この確信は、私たちがイエス・キリストの弟子であるところから導き出されるものです。首座主教たちは、同性愛の内にある人々に対する刑罰を拒絶することを、再確認しました。

首座主教たちは、キリスト教会、またアングリカン・コミュニオンの中でも、しばしば、性的指向性を理由にして、人々を深く傷つける行為が為されてきたことを認めるものです。こうしたことが起きた地にある首座主教らは、深い悲しみを表明し、セクシュアリティ如何に拘わらず、すべての人々に対する神の愛は等しいものであること、教会はその行動によって、今後決して不信を生むような印象を与えてはならないことを、再度、確認しています。

私たちは、ウェルビー大主教によって、この会議を備える中で為された協議を是とし、アングリカン・コミュニオンにおける将来の諸行事に向けた、大主教のアプローチを推奨しました。

北米聖公会のアングリカン・コミュニオンへの加盟承認についての要請が出され、それを検討しましたが、正しくは全聖公会中央協議会(ACC)に属する案件であると了解されました。首座主教たちは、そのような要請が前面に出てくれば、それは、教会行政と裁治権についての深刻な問題を惹起することになると、認識しています。

先月、パリで行われた気候変動会議の直後に、「聖公会環境ネットワーク」(Anglican Environment Network)が共催した会議には、ほぼ 200 万名に及ぶ署名請願が提出されました。化石燃料からの転換の動き、アフリカにおける砂漠の拡大、海面上昇によって、島の生活がいたるところで脅かされている太平洋諸島の人々の生存のための闘いも報告されました。

会議では、宗教的に動機づけられた暴力の現実と、それが、世界中の人々や共同体に対して与えている衝撃についても議論しました。そのような暴力が日常化している地に生きる首座主教たちは、感動的に、熱情的に、自らの状況と、自らが司牧する者たちへの影響について語りました。カンタベリー大主教自身も、多様な信仰諸共同体が共に語り合い、互いに説明責任を果たすように促すための、重要なイニシャティヴを取ってきました。聖公会の首座主教たちは、宗教的に動機づけられた暴力を一切認めず、また、今日の世界で、この悪によって苦しみを被っているすべての人々に対する連帯を表しました。

首座主教たちは、アングリカン・コミュニオンのすべての教会において、子どもたちを守るための包括的な対策が取られるようにするという提案が、全聖公会中央協議会(ACC)で取り扱われることを期待するものです。

首座主教たちは、福音伝道についてのプレゼンテーションを通して、イエス・キリストの教会とは、イエス・キリストの内にある神の愛という、変革する力の証しを担うために在るものであることを喜びました。首座主教たちは、福音伝道の経験を分かち合う機会によって元気づけられ、自らの地にある人々に福音を伝えるための力を与えられたのです。

「首座主教たちは、福音の素晴らしさと喜びをすべての人々が受け留められるように誘いながら、イエス・キリストというお方とその御働きを、不断に、また確実に、世界中に宣べ伝えるこ

とを、喜びをもって、自らと聖公会の諸教会に対して約束します。」

(補遺 B 参照)

首座主教会議は、2020年にランベス会議を招集するという、カンタベリー大主教の提案を支持しました。

首座主教は、部族主義、民族性、国家主義、身最肩、腐敗という根深い悪徳などについて議論しました。これらの課題が、戦争や暴力と密接に繋がるということについて、思い巡らしました。首座主教たちは、アングリカン・コミュニオン総事に、次回の首座主教会議に向けた研究を委ねることで一致しました。首座主教たちは、2017年と2019年に再会することを合意しました。

首座主教会議は、アングリカン・コミュニオン・オフィス(ACO)のスタッフ、ことに総事に対し、また、ランベス・パレス、チャーチ・ハウス・ウェストミンスターのスタッフに対し、感謝の意を表しました。首座主教会議は、とりわけ、カンタベリー大聖堂首席司祭(Dean)と大聖堂のすべての方々が備えてくださった、温かな歓待と心からのもてなし、思いやりに感謝しました。会議の雰囲気、祈りと互いへの聴き合いに満ちたものとする上で、非常に重要であったのが、彼らのこうした貢献でした。聖アンセルムス共同体が献げてくださった祈り、手助け、支え、ジャン・ヴァニエ(Jean Vanier)師の霊に満ちた説教、『聖オーガスティンの福音書』脇に置かれた牧杖の首部をお貸しくださった聖グレゴリウスの共同体に、感謝を申し上げます。

首座主教たちは、神からの賜物として、互いに共に在るという時間を戴きました。また、私たちの間に、多くの神の御臨在のしるしを経験しました。首座主教たちは、カンタベリー大主教によって示された個人への配慮と謙遜さ、とりわけ、この会議の議事に対して、感謝しました。私たちは、分かち合った交わりに豊かにされ、世界中の聖公会につらなる者たちの誠実な証しに強められながら、共に、この一週の時を終えます。首座主教会議は、世界の各地で、私たちの時を共にしつつ、献げてくださった、数多くの祈りに対して、深い感謝の思いを表すものです。

<補遺 A>

- 1) 結婚についての私たちの理解について、現時点で私たちの間に存在する大きな隔たりに鑑みて、私たちは聖公会の首座主教として、キリストにある私たちの一致をどのようにすれば保つことができるのかを祈り、また考えるために、集まった。
- 2) 結婚に関する教会法を変更した米国聖公会の最近の展開は、私たちの大多数の管区が持っている信仰や教えからの根本的な逸脱を表している。他の管区においても起こり得る展開は、この状況をさらに悪化させることになろう。
- 3) 私たちは皆、これらの展開が私たちアングリカン・コミュニオン中に、さらに深い痛みを引き起こしてきたことを認める。
- 4) 聖書の教えに照らして、教会の伝統的な教理は、結婚を男と女の間における忠実で生涯にわたる結び合いとして大切にしている。ここに集められた大多数は、この教えを再確認するものである。
- 5) 従前の首座主教会議の一貫した立場を踏まえて、教理の問題に関する普遍的(catholic)な一致のない、そのような一方的な行動を、私たちの多くは、アングリカン・コミュニオンにおける互

いこの関係の内にあることを通して含意される相互の責任と相互依存からの離脱と見做すものである。

6) そのような行動は、私たちの交わりをさらに傷つけ、私たちの間により深い不信を生み出すことになる。これは私たちの間における重大な隔たりという結果をもたらし、「コミュニオン」(Instruments of Communion) が持つ機能と、私たちの、自らの歴史のおよび今ある関係の表現の仕方に、大きな緊張をもたらすものとなる。

7) 共に歩みたいというのは、私たちの一致した願いである。しかしながら、これらの事柄の深刻さに鑑み、向こう 3 年間、米国聖公会は、もはや、エキュメニカル、および宗教間の協議体において、私たちを代表しないし、アングリカン・コミュニオン内の常置委員会を構成する者として任命されたり、選出されたりするべきではなく、アングリカン・コミュニオン内の協議体に参加する場合も、米国聖公会は、教理や教会行政に関するあらゆる課題についての意思決定に加わることはない、ということを求めることによって、この隔たりが存在することを、私たちは公式的に承認するものである。

8) 私たちは、関係の回復、相互の信頼の再構築、傷の残滓の癒し、私たちの共通性の範囲の確認、私たちの間にある大きな隔たりの探究、それらがキリストの愛と恵みのうちに私たちの間に保たれることの確証を目的として、私たちの中での話し合いを続けるためのタスク・グループを任命するよう、カンタベリー大主教に求めた。

#### <補遺 B>

私たちは、聖公会の首座主教として、イエス・キリストの教会は、この世界中で、聖霊の力により、変革される神の愛についての証しを広めるためにあるということ、共に確証するものです。

神の世界が、未だこの復活の愛がいかに必要かに気づいていないことは明らかであり、私たちはそれを知らしめたいと願います。私たちは、福音の素晴らしさと喜びをすべての人々が受け留めるように誘いながら、福音伝道を通して、イエス・キリストというお方とその御働きを、不断に、また確実に宣べ伝えることを約束します。

私たちは、私たちを語らしめ、新たに生まれさせ、教会を据えられたキリスト・イエスの内に啓示された真理へと導く聖霊の力にまったく依り頼みます。

イエス・キリストの弟子たちは皆、洗礼によって、信仰、希望、そして愛の内に、イエスに対し、またイエスについて証しする者となるのです。

私たちは、この世がイエス・キリストを主と知るようになるために、共に、祈り、聴き、苦しみ、そして、この身を献げることがここに固く誓うものです。

聖霊よ、お出てください。

(訳：西原廉太)